ハーバート・スペンサーの哲学と進化論

ハーバート・スペンサーの哲学の基本的立場と性格

ハーバート・スペンサーは、人間の自然な傾向と進化の法則によって、社会の構成と変化を理解しようとするアイデアを展開した。「存在するものは、自然の法則に従って進化する」という信念が、スペンサーの社会学や人間学の基盤であった。スペンサーは、社会は個々の生存を達成するための競争の中で進化する、という観点から社会の組織と変化を考察した。しかし、世界の中には自由意志や個体の意思が存在し、それが社会進化の重要な要素であるとする点も強調した。

ここに述べたスペンサーの思想は、当時の人々にとって非常に異端なものであった。スペンサーは、進化の法則に基づいて社会を理解し、社会改革を導くことを目指していた。彼の思想は、その後の社会学や人間学の発展に大きく影響を与えた。
って世界を見てている如き立場から、そのような世界を対向する自己に対して現われる対象的世界（実はそれは世界観）である。一層原理的に言えば、世界は、意識の場における主観－客観の対立を前提としつつ、しかも主観との関係を断切って、客観から且つ客観としてそれ自身において純粋に見られるようになったということである。このような世界観を現われる知の知性、科学的認識の範囲及び科学者についての知識の範囲内に限定されるべきものであることを、当時の人々からも誤解を受けないように力説するのである。

この議論（進化論）がもつ存在論的意味について二、三つ加えねばならぬ。かなり多くの人々は、いずれの時代においても科学的知識は哲学の仕事である。デカルト以後の西洋における近代哲学の新たな出発点を我々は認識論としての哲学の成立に求めることができるのである。その認識論としての哲学は、自らの課題として知識の方法論的態度を通じて、確かな知識の出発点、我々の認識の可能性、起源、妥当性等を主題的に問う。そのことによって同時に科学的認識の基礎づけはなされ得たのである。そして科学的知識は哲学によってその認識論的基礎づけが行われた近世以降様々な方面に分化して次のように語り、自分の探究が科学的認識とその対象の範囲内に限定されるべきものであることを、当時の人々からも誤解を受けないように力説するのである。

（篠山）
える切を投げ際の労を同時に学ぶ。彼は、他のいかなる人とも感得ないほど明るい、それ自体として考えると最も単純な事実を全く理解不可能であると感じられる。絶対的知識が不可能であることを、彼だけは本当に見ている。すべてのものの中に測り知れ硫酸神秘があることを、彼だけは本当を持っている。科学の存在論の意味においてこのように半ば消極的に語ると同時に、他方、経験的世界に関する限り、基礎的知識としての科学の価値を最高に評価する。最も価値ある知識は何かという最初の問いに対する答えは、直接の自己保存である。科学私保存、すなわち、生命と健康にとって最も重要な知識、それは「科学」である。間接的自己保存、つまりいわゆる生活手段の獲得により最も貴重な知識、それは「科学」である。親の機能を正当に果たすための正しい手引き、それは「科学」においてのみ見出される。市民の行為の正しい規範に必要な過去現在の国民生活の説明、この説明において不可欠の鍵、それとも「科学」である。同様に、あるゆる芸術、科学の人間的価値、倫理、文化、芸術及び宗教万能の基盤と見做し、科学的知識がそれらの成立及び発展に不可欠なものとして大いなる動力となって来たことを力説する。科学のいわば「汎科学主義」は、彼が少年時代に父親から熏陶を受けたエクセントリックな科学尊崇の態度及び教育に由来するところ少なくながらものがあったと考えられる。そしてこのことは、元来スペンサーが数学者（幾何学）もと力学を科学的思考へと志向し、かくして彼の哲学を「科学哲学」として限定し方向づけたことになった。スペンサーの哲学は、既に見たようにその基本的立場として英国経験論の系譜に属し、実を前提としながらも実在そのものの証認は人間には不可能であるとする不可知
論に立つ。そして思考の方法及び性質という観点からは、それは、自覚的・反省的分析的というよりむしろ対象の分析的構成的であって、我々は哲学としてのその全体の分析的構成的である。我々は哲学としてのその全体性を分析的構成的である。しかしベンサーやの哲学のかかる立場（実験論的性質）が、それが哲学的に重要な問題を含んでいると考えられる。つまり、科学哲学はF・ペイコイク以来の英語の英語的立場が、実在を認めながらもそれ自体の認識の不可能であるとする根本的立場から、認識可能な経験的世界の各現象の基礎を我々に直接与えられたものと、その具体的経験としての我々の実在が求める、むしろかかる感覚を実在と見做すのである。然し、このような意味における感覚は、外界的事物が我々の感官を触発し、そのことによって成立するものと考えられているが故に、その根拠には物質的実在が想定されており、その意味で唯物論に通底するところがある。他方、科学は、その対象を経験界に限定し、経験的世界の現象を対象として成立するものと考えられているが故に、その根拠には物質的実在が想定されており、その意味で唯物論に通底するところがある。
根本的には両者の関係に関する彼の存在論的な前理解は要請とも言うべきような見方に依拠していると考えられる。つまり、科学と宗教は同一事実の相反的な面を表す。前者は事実の可視的、可変的な側面に関わる真理の組織体であり、絶えず成長し且つ精鍊され続けて行く。後者は不可視的、永遠的な側面に関わる真理を表現する。両者は増幅する。科学と宗教の間には根本的な調和若しくは融合が生じなければならないという見解である。しかも両者がこのような共通の地盤を見い出し得るのか、それぞれの領域における個々の観念の次元における観念の次元においてのみである。と言ったものの、信仰は科学的認識の範囲を越えて存在し得るので、個々の事象に関する観念が相互に排他的になることすらあるからである。科学と宗教の関係を捉えた常の狭い見解は、かかる次元における両者の関係を捉えた見解である。科学の次元で科学的知識に於て、科学の次元においては両者の関係はしばしば相反し、排他的な関係にある。科学の知識においては科学的知識の次元では高い、科学的知識が科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉え、科学的知識を捉える。
科学は、我々の行動に際して常識よりも一層有益な情報を提供し、我们在解明に関する知識を学ぶことができる。科学は、我々の常識とは異なる視点から問題を捉え、新たな解釈を提供する能力を持っている。これにより、科学は我々の生活をより豊かにし、より良い社会を築くことができる。
スペッセンサーの哲学が基本的に「科学哲学」として性格づけられ、更に彼の科学哲学は「進化論的綜合哲学」として特質づけられるとするならば、進化論は単なる異同をどのように理解したら及ぼすがしの持続を、進化論的綜合哲学の本質をどのように理解したらよいであろうか。進化論の総合と科学哲学との密接な関連についてスペッセンサーの場合、我々は二つの面からこれを明らかにすることが出来るであろう。一つは、彼の思想の発展の過程を追跡することが出来ることである。もう一つは、彼の思想的自叙伝の影響である。この面からの解明にはスペッセンサー自筆の思想的自叙伝も多くの示唆を与えてくれる。
全体的構成と主題の展開を追究することによってである。

しかし、ここで著者が示す二つの面から当面の問題を論議する
ことは不可能であるので、差し当たって要点についてのみ
論述することにしたい。

そこで、ここに言う「綜合哲学の理論」とはどのように
な真理認識乃至事象の把握の仕方を示すのであるか。

「綜合哲学体系」におけるスペンサーの思考若しくは叙述
の方法は端的にそれを表現している。即ち、それは極めて
形式的に言え、諸理念若しくは事象の、特殊的・一般的
"P"、抽象的・帰納的・演繹的"の把握・説明である。

スペンサーの次のようなる言表はこの点と関連づけて考察す
ることが出来るであろう。

一つの科学の完全な知識は、多くの人々によって、いくつ
の科学の一般的な知識よりも教育的な原理として主張され
ている。しかし、それぞれの科学において、進歩は、他の諸科
学が提供する諸概念に依存しているのである。哲学的である
科学の解釈における事例に於て、自然科学の解釈における事例に
於て、自然科学の知識を解釈するためにも、一般化的諸科学
の真理が引き合いに出されるべきではない。特にこの事例と

その場合の方法の一つの例を提供している。動植物の
有機体のさまざまな種類によって示された成長の量と限界と
は、生物学だけに閉じこもっているには説明がつかない。

生物学の特性が、引き合いに出されるべきではない。生物学
の特性は、生物学だけに閉じこもっている生物学の特性を
顕著に示されていることである。それは、この卷から生物学
的な現象全体の解釈に必要な説明が示されているからである。

右の引用文はいくつかの事柄を示唆しているが、要するに、「綜合
とは、特殊的な真理との一般的真理との関係において包括的に
解釈すること。換言すれば、事象を個別化しそれ自体にお
いて単独的に捉えるのではないか、部分と全体との相互依存
性及び部分と全体との有機的連関においては、特殊的な真理
は、全体（一般的真理）的部分として相互に密接な連関を
有し、一般的真理は、一部を有する全体（特殊的真理）を
組合せたものである。かかる有機的把握においては、相互
に含まれるものの内分を互に相依存的として相互に密接な
内分性である。部分は全体

の部分として相互依存的としそれぞれが密接な内分性をも
ち、一つの全体を形成する如き方法を「有機的」という
ならば、概念若しくは事象のかかる有機的・統合的把握即

（稲山） 54
「進化萌」は、有機体がどのように社会の変化を有するのかという観点から、進化論の主張を唱えるものである。しかしながら、「進化萌」における進化の視点と、科学的進化論との関係性は複雑である。進化論は科学的に確立された理論で、生物種の進化や生物多様性の形成を説明するものである。一方、進化萌は哲学者の科学と芸術の関係に焦点を当て、進化の視点で芸術の史実を考察するものである。進化萌は進化論と芸術の融合を企図し、進化の視点で芸術を再評価する試みである。進化萌は進化論を芸術の視点で再解釈し、芸術の進化を考察するための枠組みを提供するものである。進化萌における進化の視点は、科学的進化論と異なり、芸術の歴史を考察する視点に焦点を当てている。進化萌は科学的進化論と芸術の関係性を再評価し、進化の視点で芸術を再評価する試みである。
いかなる胚種も、最初の段階では、組織の点で化学的組成の点でも全く均質な物質から成る。この物質の二つ以上の間に相違が現われるものが最初の一歩である。この現象は、分化である。分化された部分の一つ一つにも、間もなく差異が生じ始め、やがて、この第二の分化が最初の分化と同様に明確なものとなる。このプロセスは絶え間なく繰り返され、成長する胚種のあらゆる部分で同時に進行し、そして、こうした無限の分化によって、ついに成熟した動物を構成する組織や器官の複雑な結合が生まれる。これらは、あらゆる動物の歴史である。有機体の進歩が同質から異質への変化であることは誰の論的余地がない。地球、地球上の生命、社会、政治、経済、言語、文学、科学、芸術、そのいずれもの発展においても、単純なもののが順次分化を経て、複雑なものに至るこの同じ進化が繰り返されている。進化の限界最も古い宇宙の変化から文明の最新の成果に至るまで、同質から異質への変化が進歩の根本であることがわかるであろう。

要するに、『有機的進化』とは、有機体の胚種から成熟体への成長過程において最も典範的に見られる、物質と運動の同質性から異質性への変化の謂であります。それは、均質から多様性、単純なものから複雑なもの、低次なるものを高次のものから多様性、単純なものから複雑なもの、低次なるものを高次のものへと変化する進化を指すものである。

つまり、「有機的進化」は、宇宙の諸現象（物理、生命、精神、社会、倫理）を進化の観点から順次進化構成したことごとの体験を、戦略的に構成することにより、宇宙の変化多様な過程を総合的に説明しようとしました。しかしそれが「体系」という形態を取って成立しているのは、進化したものの調割を再構成することによって、多様な進化の過程を追究しようとしたからである。しかし、ペルケロンの指摘した如く、進化という事象、それ自体を説明したことにはならない。即ち、「有機的進化」は、進化そのものを説明することを目指した。